

図1 十勝南部のある農場のRFS  
(一般的なスコアは、泌乳初期～中期で3、泌乳後期～乾乳牛で4)

1 乾物摂取量は十分ですか？  
牛の高い健康水準を維持しつつ、安定した出荷乳量を維持するためには、牛にもりもりエサを食べてもらうことが重要です。牛の直近2〜6時間の乾物摂取量(DMI)を表す指標としてルーメンの張りを評価するルーメンフィルスコア(RFS)があります。昨年調査を実施したところ、スコアが2以下と採食量が少ない牛が散見される農場がいくつかありました(図1)。

採食量が不足すると、無脂固形分の低下や、脂肪の分解による肝機能低下が発生しやすくなります。改善には原因の特定が必要です。

乾物摂取量と飼槽の関係

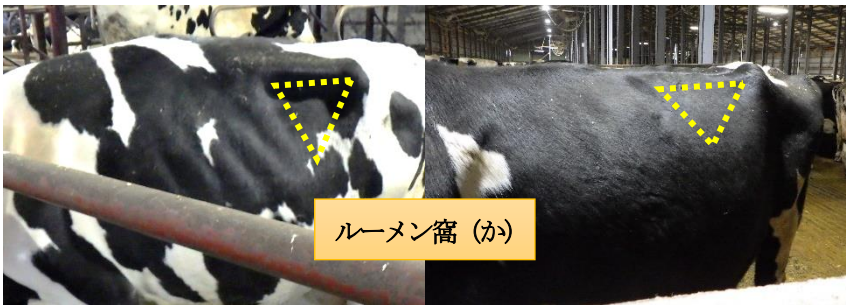


写真1 RFS 2 (採食量は不足気味)

写真2 RFS 4 (採食量は多め)

RFSの評価方法は、牛の左側の腰椎横突起下部と腰角とろつ骨の間の三角形のルーメン窩の張り具合で評価します(写真1・2)。同じ牛でも評価する時間帯でスコアは変動しますので、継続して確認する場合は同じ時間帯に確認します。

2 乾物摂取量と飼槽の関係

採食量が不足する農場でよく見られるのは牛の首にコブが目立つ場合です。このような農場では、ません棒や連動スタンションの取付位置を修正することで採食量を増やせる可能性があります。

図2はフリーストール牛舎でのません棒と連動スタンションの推奨サイズ(成牛)です。

ません棒の場合、突出幅(図2①)が推奨値よりも短く、餌押しが不足している、牛の首にコブが目立つようになります。また、突出幅が長く、飼槽隔壁(図2②)が推奨値よりも低い場合は牛が飼槽側に飛び出しやすくなるため注意が必要です。突出幅を30〜35cmにしたい場合は、飼槽隔壁の高さを55〜58cmとやや高めになります。また、通路と飼槽の高低差(図

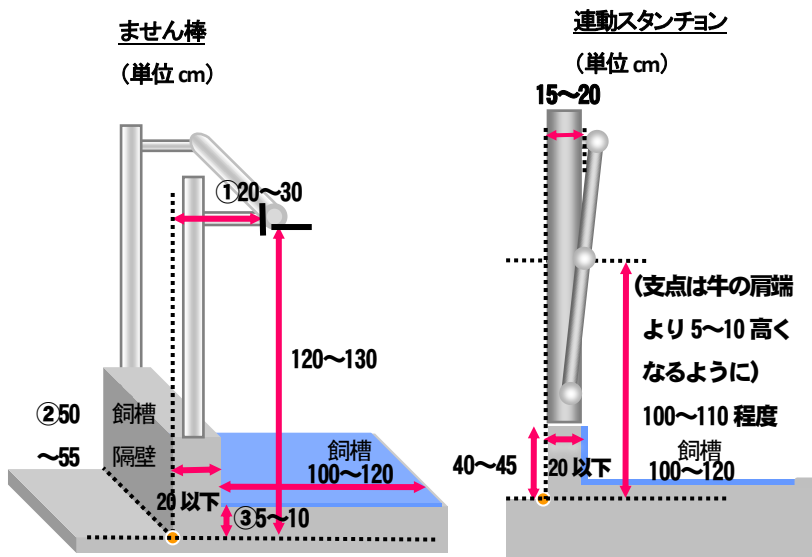


図2 フリーストール牛舎の飼槽構造の推奨値(成牛)  
(MWPS-7、酪農試験場(2007)より推奨値を引用)

2③)が大きくなりすぎると、餌が給餌通路側へと遠く飛ばされる可能性が高くなり、餌押しの必要回数が増加します。

飼槽構造が今よりも推奨値に近づければ、採食可能範囲は広がり、餌押しの必要回数も少なくなります。農場の省力化と乾物摂取量の向上を目的に、今一度、飼槽周辺のサイズを見直してみませんか。